

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ジャグラー ニューヨークの25時 (4K 修復版) (Night of the Juggler)

1980年/アメリカ映画
配給: サジフィルムズ/101分

2025 (令和7) 年 12月 13日 鑑賞

テアトル梅田

Data

2025-120

監督: ロバート・パトラー

原作: ウィリアム・P・マックグヴァ
ーン「ジャグラーニューヨー
クの25時」

出演: ジェームズ・フローリン/ク
リフ・ゴーマン/リチャー
ド・S・カステラーノ/ダン・
ヘダヤ/ジュリー・カーメン
/アビー・ブルーストーン

👁️👁️ みどころ

「ジャグラー」とはベテン師、詐欺師のことだが、本作は何の映画？チラシには、「日本初公開から45年、世界中のファンが望みながらも長らく観ることの出来なかった幻の傑作犯罪アクションが4K修復を経てついにスクリーンに甦る!!」の文字が躍っているが、1980年のアメリカ映画がなぜ今4K修復版で公開されたの？

2025年の映画と1980年の映画の違いは、本作導入部に見る喧騒のニューヨーク市内での追跡アクションを見れば明らか。CGなしの肉弾戦にびっくりするはずだ。身代金目当ての誘拐事件の成功率が低いことは、『64—ロクヨン』(16年)や『ゲティ家の身代金』(17年)を見ても、さらに本作を見ても明らかだが、本作の犯人があえてそれを決行した動機は？計画の緻密さは？

他方、身代金要求のターゲットは当然ニューヨークの不動産王だが、本作に登場するその男のモデルは一体誰？なるほど、それを考えれば、本作が今4K修復版とされたことにも納得！

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

■□■「ジャグラー」とは？何の映画？なぜ今4K修復版が？■□■

本作はアメリカ映画だが、タイトルとされている「ジャグラー」とは一体ナニ？これはデジタル大辞泉によれば、①「ボールなどの小道具を手先で扱う細かい芸を見せる人。曲芸師。」、②「ベテン師。詐欺師。」とされている。本作では、それは②の意味で使われているようだが、そのココロは・・・？そしてまた「ニューヨークの25」というサブタイトルはなぜ？他方、本作は1980年の映画だが、「午前10時の映画祭」に選ばれるほど有名なものでないことは、私が全く知らなかった映画であることから明らかだ。

しかして、なぜそんな映画が、今「4K修復版」で上映されるの？そう思ってチラシを見

ると、そこには、「70年代の終わり、まだ危険でギラギラしていたあの街で、奇跡のような1本の映画が生まれた。」「日本初公開から45年、世界中のファンが望みながらも長らく観ることの出来なかった幻の傑作犯罪アクションが4K修復を経て遂にスクリーンに甦る！！」との刺激的な見出しがあり、その下には次の説明がある。

その息つく間もないスピード感と臨場感溢れる演出で、カルト的人気を誇るものの、権利問題から長らく鑑賞が難しく、配信はおろか1980年代に一度VHSが発売されただけの幻の傑作が、4K修復され遂に劇場のスクリーンに還って来る!

原作はアメリカを代表するベストセラー作家ウィリアム・P・マックグヴァーンの同名小説。

監督は『乱気流/タービュランス』(97)他の俊英ロバート・バラウ。

主演は『カプリコン・1』(77)のジェームズ・ブローリン。

全編ニューヨークロケで撮影された、CGとは無縁の、生身の人間による

迫真のアクションシーンは、映画本来の愉しさに満ち、誰もが血沸き肉躍ること間違いなし!

なるほど、なるほど。

■□■ストーリーは?70年代のニューヨークの猥雑ぶりは?■□■

更にチラシには、「白昼堂々、愛娘を誘拐された男が走って走って走りまくり、体ひとつで犯人を追い詰める」という見出しがあり、それに続いて次のとおりの説明がある。

70年代の終わり。まだ危険で猥雑だった頃のニューヨーク。それはいつもと変わらない平凡な朝の風景のはずだった。

シングルファザーの元警官ボイドは、学校に送る途中の娘キャシーを、富豪の娘と人違いしたサイコな誘拐犯に連れ去られてしまった。警察はアテにならないばかりか、ボイドに恨みを持つ元同僚のイカれた巡査部長バーンスからは逆に追われるハメになる…。

タクシー運転手、ボルノショップの女、不良グループ、動物登録所の娘…。

都会に生きる様々な人々が入り乱れ、ノンストップの奪還劇が始まった!

本作が公開された1980年といえば、1979年に独立して坂和章平法律事務所を設立した私がひたすら弁護士業務に励んでいた時期だから、映画館通いは夢のまた夢の日々。したがって、本作のことや本作の監督や俳優も全く知らなかったのは当然だ。しかも、上記のような事情で、「本作の鑑賞が難しく」、「幻の傑作」とされていたのなら、なおさらだ。

本作の冒頭シーンは、まさにこれぞ「70年代の終わり。まだ危険で猥雑だった頃のニューヨーク」の街の姿がスクリーン上いっぱい映し出される。そんな中、一軒のダイナーの席に座り、目玉焼きの朝食を前に、何らかの決意を固めているらしき怪しげな男ガス・ソルティック(クリフ・ゴーマン)の姿が登場するので、この男の動静に注目!

他方、1人娘のキャシー(アビー・ブルーストーン)の15歳の誕生日を奇妙なスタイルで祝っている父親ジョン・ボイド(ジェームズ・ブローリン)が、登校する娘と一緒にジョギングする姿が登場するが、娘と別れ、娘を見送った途端に、キャシーがソルティックの車の中に誘拐されてしまうから、さあ大変だ。本作最初のハイライトは、疾走に次ぐ疾走でソルティックを追うボイド、乗り込んだタクシーの運転手がたまたまノリノリのブ

エルトリコ系だったため、その運転手の運転でソルティックの車を追うボイド、別れた妻の車に乗ってソルティックを追うボイド、牧師の車を借用（強奪（?））してソルティックの車を追うボイドの姿が次々と登場するものの、あと一步のところまで振り落とされてしまったから残念！

そんな最初のハイライトシーンの中、ボイドはニューヨーク市警の元刑事であること、サウスブロンクスに住んでいるソルティックは、「昔は美しい場所で、俺の家族がいくつもの家を持っていたが、よそ者のせいでめちゃくちゃになった。やつらに報いを受けさせてやる」との恨みから、キャシーを不動産王クレイトンの娘だと誤解して誘拐し、身代金を要求していること、がわかってくる。しかし、同時にキャシーはクレイトンの娘ではなくボイドの娘であることが観客にはわかるので、アレレ、アレレ。ソルティックはキャシーの説明に全く耳を貸さず、その後も一方的に自分の主張をキャシーに聞かせるだけだったから、さらにアレレ、アレレ。ソルティックは一刻も早く重大な誤解をしていることに気づく必要があること明らかだが・・・。

■□■ニューヨーク市警の腐敗状況は？警官の腐敗の実態は？■□■

1984年に「阿倍野再開発訴訟」を提起した私は、1970年代後半から80年代におけるニューヨーク市の財政危機が深刻だったことやニューヨーク市の腐敗ぶりをそれなりに知っている。しかし、本作で一貫して流れている70年代後半のジョギングする人々と忙しそうに動き回る人々によるニューヨークの「喧騒に満ちた、汚い（?）街」には恐れ入るばかりだ。街の汚さは、奇跡的な「戦後復興」を果たした日本も同じだったが、日本では1960年代の公害反対闘争盛り上がりの中、大気汚染が改善したし、1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博を契機に街の美化が進んだ。しかし、70年代から80年代にかけてのニューヨークの街は、逆にボロボロに！本作は、そんなニューヨーク市の街の実態を、ジョギングする人々の姿と洪水のような車の波、そして街全体の喧騒によって徹底的に見せてくれるので、それに注目！

そんな70年代後半のニューヨーク市警の中にろくな奴（公務員）がいないのは当然。ボイドの当て逃げ、駅の警官への暴行、車の盗難事件の捜査責任者になったトネリ警部補（リチャード・S・カステラーノ）は職務には忠実だが、市長や警察署長に大きく反発していることは明らかだ。また、病院を抜け出し1人で娘の行方を探そうと必死になっているボイドを、ボイドのたれ込みによって左遷されてしまった（?）かつての相棒のバーンズ巡査部長（ダン・ヘダヤ）が見つげ出し、追いかけて回し始めたから、さあ大変！個人的な恨みをボイド逮捕という公的な執念に転化させた彼は、ライフルを持ち出し、多くの市民が行き交うニューヨーク市内でそれをぶっ放すのだから、ハチャメチャだ。

本作を見ている限り、いくら娘が誘拐されたとはいえ、他人の迷惑を顧みることなくひたすらその犯人を追うボイドの姿が異常なら、車の窃盗犯等にされているボイドをライフルを持って追い回すバーンズの姿はそれ以上に異常だ。それに比べると、トネリ警部補の

やり方はかなりマシ・・・？

■CGなしの肉弾戦の連続は感動的！■

映像技術が進歩する中、近時はCG撮影が増大しているが、本作公開時にはそんなものはない。したがって、「白昼堂々、愛娘を誘拐された男が走って走って走りまくり、体ひとつで犯人を追い詰める」というストーリーに“特化”した本作が、肉弾戦の連続になるのは当然だ。

前述した、最初のハイライトにおけるボイドの疾走ぶりや激突ぶりが感動的なら、その後も再三登場する「走って走って走りまくり、体ひとつで犯人を追い詰める」肉弾戦の連続は、まさに感動的！これぞ映画だ。かつて観たジャッキー・チェン主演のさまざまな香港映画における体当たりカンフー劇も感動的だったが、カンフーの達人でもない単なる一警察官が、自分の娘を誘拐犯から解放するためとはいえ、ここまでトコトン肉弾戦を貫いていく姿は感動的だ。昭和のアクション全盛の時代、TVドラマでも石原裕次郎が社長を務める石原プロ制作による熱血刑事ドラマ『太陽にほえろ！』シリーズが長期にわたって大ヒットしたが、まさに本作はそのニューヨーク版だ。また、『太陽にほえろ！』は警視庁の七曲警察署に集う刑事たちのチームプレーのドラマだったが、本作はニューヨーク市警を解雇されてしまった一匹狼の元刑事によるそれだから、その孤立ぶりにも注目！

■パンフレット掲載のこだわりコラムの数々は必読！■

私は2002年6月に『SHOW-HEY シネマルームⅠ』を出版するについて、はじめて「弁護士兼映画評論家」と自称した。もちろん、弁護士はれっきとした国家資格だが、映画評論家という肩書きは誰でも勝手に名乗れるもの。したがって、それに値するかどうかは世間が評価するものだ。そう考えると、私の目には、映画宣伝のお先棒かつぎの役割しか果たしていない、いわゆる“ライター”と呼ばれる人種は、真に映画評論家と言えるの？そんな疑問がある。それに対して、本作のパンフレットに寄稿している諸氏は、まさに真正正銘の映画評論家や映画のプロだ。

本作のパンフレットには、蓮實重彦氏の「たやすく走りだそうとはしない映画がいきなり疾走しはじめることの感動について」をはじめ、町山智浩氏（映画評論家）のCRITIQUE「ジャグラーとは誰なのか」、渡部玄氏（映画評論家／編集者）のCOLUMN「“怒れる者たち”の実存と生存ーニューヨーク犯罪映画」、上條葉月氏（字幕翻訳家）のCOLUMN「ニューヨーク、ジャグラーたちの欲望が駆け回る街」があるが、これらはいずれも本物の映画評論家、映画のプロと評価するに値する諸氏の文章だから、こりゃ必読！

■身代金目的誘拐事件の成功率は？過去の事例は？■

1963年に起きた「吉展ちゃん誘拐殺人事件」の身代金は50万円、『64ーロクヨン』（16年）（『シネマ 38』10頁、17頁）のそれは2000万円だった。それに対して、『ゲティ家の身代金』（17年）（『シネマ 42』172頁）におけるゲティ家に対する身代金は1700万ドル（50億円）と、めちゃ高かった。それはもちろんゲティ家が億万長者だったからだが、そ

こで興味深いのはゲティ家にとってそれが高い？それとも安い？の問題以前に、ゲティがその支払いを拒否したことだ。

身代金誘拐事件は、金銭の授受に際して犯人が逮捕される確率が高いから、あまり効率の良い犯罪ではないと言われている。その上、本作では誘拐犯たるソルティックは、身代金を要求する相手を不動産王クレイトンと定めたにもかかわらず、その娘をニューヨーク市警を解雇され、ほとんど一文無しのボイドの娘キャシーと間違えてしまったから、これはお笑いグサ。本来、洒落にもならないものだが、それが映画になるのだから面白い。

■□■誘拐犯がターゲットにした不動産王とは？■□■

それはともかく、ニューヨークのサウスブロンクスに住んでいたソルティックが、「昔は美しい場所で俺の実家がいくつも家を持っていたが、よそ者のせいでもちやくちやになった。やつらに報いを受けさせてやる」と、キャシーにアピールする“やつら”とは一体誰？それはこの土地を買い占めてポロ儲けをした不動産王クレイトンのことだが、そのモデルは一体ダレ？

日本では、1980年代の不動産バブルが1989年に弾けたが、不動産の開発や転売利益で大儲けし、不動産王になった人物はたくさんいる。そんな人物は1970～80年代のニューヨークにもたくさんおり、クレイトンはその1人だ。

町山智浩氏の前記CRITIQUEによれば、1970年代のニューヨーク・セントラル駅の向かいの荒廃したホテルを1000万ドルで買収したある不動産業者が、市から再開発の免税を受けて改装し、1980年に高級ホテルとして再オープンした結果、80年代後半、バブル経済でニューヨークの景気が好転し、ホテルの価値は高騰し、彼が1996年にそれを売却した時には1億3000万ドルの利益を上げたそうだ。なるほど、なるほど。

しかして、70～80年代のニューヨークでそんなにポロ儲けをした不動産王は誰？それこそ、まさに第47代アメリカ大統領のドナルド・トランプだ！なるほど、だからこそ、それほど有名でもない本作が、4K修復版として復活！？

2025（令和7）年12月17日記